地域おこし協力隊を虜にした地域の魅力

地域おこし協力隊って？

長崎市内で地域おこし協力隊が活動していることをご存じですか？

地域おこし協力隊は、市外から移住してその地域のブランドや地場産品の開発・販売・PRなどの活動を行う人のこと。

今回は、現在市内の各地で活動する4人の地域おこし協力隊を通じて、まちの魅力を紹介します。

4人の地域おこし協力隊のかたがいる場所は下の図を見てにゃ（5月11日時点）

外海地区地域おこし協力隊
水野さん(6ページ)

伊王島地区地域おこし協力隊
林田さん(5ページ)

高島地区地域おこし協力隊
石川さん(5ページ)

野母崎地区地域おこし協力隊
斎藤さん(6ページ)

高島地区地域おこし協力隊
石川 康樹さん

石川さんは、「どうやったら大好きな高島に住めるかな？」その思いがきっかけで地域おこし協力隊になりました。

高島との出会いは、伊王島に遊びに行った際に偶然立ち寄ったことでした。高島の雰囲気が気に入り、3年間通ったそうです。その間に仲良くなった地域の方々の優しさや温かさに触れ、「高島に住みたい」という気持ちが強くなりました。

高島に住む方法を考えているときに、音楽グループ「RAINBOW MUSIC」のリーダーから地域おこし協力隊募集の情報を聞き、高島への移住を決めたそう。

高島の良いところは、離島感があまりなく、船ですぐ出掛けられるところ。その代わりに、島には大きなレジャー施設などが無いため、予定を詰めたり忙しくせず、自分以外のさまざまなモノに邪魔をされることも無い「ゆっくりとした時間が流れる」感覚の高島。自分自身のことを考える時間がたくさん取れるのも良いところだそうです。

そんな石川さんは、協力隊として、シュノーケリングのインストラクターや海洋講習のサポートをしています。

また、高島の農園で特産品「高島フルーティトマト」の収穫を行う石川さん。規格から外されたトマトを使い、料理人だった経験を生かしてソースやアイスを作っています。夏に海水浴場の海の家で提供しているそう。

今後は、そのソースやアイスを製品化したりして、島の内外の人に高島の魅力を伝えていきたいと話します。

伊王島地区地域おこし協力隊
林田 慎一さん

林田さんは、両親が暮らす長崎に戻りたいという思いと、地域を盛り上げる仕事をやりたいという思いから伊王島地区地域おこし協力隊になりました。

移住前は、伊王島は市街地から遠い場所だと思っていましたが、いざ住んでみると「リゾート気分が味わえる場所がこんなに近くにあるんだ」と驚いたそうです。

2月に地域おこし協力隊に就任した林田さん。地域になじむため、島内や市内南部のイベントをはじめ、自治会の活動に参加してみたり、伊王島のママさんたちに交じってコーラスに挑戦したりしています。地域のかたはおだやかで、温かく迎えてくれたそうです。そのかいもあってか、「林田くんはどこにおっても目立つね！」など、地域のかたに声を掛けられることが増えたとか。

これから林田さんは、地域おこし協力隊として空き家問題などの課題に取り組もうとしています。現在は空き家管理士の資格取得を目指して勉強中。地域のかたと一緒に空き家のことを考え、リモートワークなどができる長期滞在可能な環境を整えたいと話します。

また、地域のかたや観光客、移住希望者、行政が望む伊王島の姿を聞き、最適な方法を見付けることで地域を盛り上げていきたいと言います。

そんな林田さんの伊王島推しポイントは、朝活。仕事の前に、波の音を聞きながら島をウオーキングし、温泉に入る。皆さんもそんなすてきな朝を過ごしてみませんか？

外海地区地域おこし協力隊
水野 新さん

西日本中で唯一
ピン！ときた外海

岐阜県から移住した水野さんは、お子さんが生まれる前に、もう少し自然が豊かなところで子育てしたいと思い、奥さんと相談し、外海地区の地域おこし協力隊になりました。移住先を外海に決めるまで2年かけて西日本をまわったそうです。

移住の決め手は、外海を訪れた際に出会った大中尾棚田保全組合の組合長さん。おおらかでさっぱりとした性格の組合長さんが住むこの地区は、地域のかたも良いかたが多いに違いないと思ったそうです。地域おこし協力隊になったのは、ちょうど良いタイミングだったのと、自身の農業に関する経験を生かせると思ったからだそう。

今では3人のお子さんの子育ては、地域のかたに見守られながら、楽しくできているそうです。

水野さんのメイン活動は、大中尾棚田保全組合の活動のサポート。棚田での農作業をはじめ、イベントの支援などを行っています。大中尾棚田は棚田オーナー制度を取り入れているので、一般のかたが田植えや稲刈りをする際のお手伝いを行っているそう。自ら無農薬のお米も作っています。

また、外海地区などに特化した空き家バンク「ソトメヤ」の運営も行っています。昨年は5軒の入居が成立し、現在も物件待ちをしているかたがいるそうです。

さらに、新たな特産品を開発。「トゥルシー」という熱帯性のバジルは、外海地区の気候と相性がよく、無農薬でも栽培しやすいそうです。現在では、そのトゥルシーを使ったハーブティーを商品化し、販売しています。

水野さんがお気に入りの場所は遠藤周作文学館横にある建物「アンシャンテ」。スマホも食べ物も持たず、角力灘（すもうなだ）を眺めてのんびりするのが好きだとか。

野母崎地区地域おこし協力隊
斎藤 開さん

地域のかたの
強引なやさしさ

北海道から歩いて日本一周を目指していた斎藤さんは、折り返し地点と考えていた野母崎地区で足を止めました。自分で決めた海側を歩くというルールで旅をしていたら、野母崎にたどり着いたそうです。

旅をしていた頃、長崎の人からは、強引な優しさやあたたかさを感じることが多かったと振り返ります。

野母崎に着いた日は雨や風がひどかったものの、野宿を考えていた斎藤さん。ちょうどその時、長崎のもざき恐竜パーク所長 安達さんに声を掛けられました。長崎市恐竜博物館の案内や温泉に連れて行ってもらったりしたそう。そのつながりから、五歌祭（ごかっさい）というイベントの手伝いに誘われ、その時に知り合ったかたから驚くほどおいしい魚を振る舞われたとか。

地域の人と触れ合う中で、野母崎には「面白い人が多くて一緒に何かやりたい」と思うようになったそう。その時に地域おこし協力隊の募集があり、そんな人たちと一緒に活動できるかも、と協力隊になりました。

地域おこし協力隊の活動の一つは「観光芋ほり園」の復活。6月上旬頃に子どもたちとイモの植え付けをし、秋に収穫できるよう準備しています。耕作放棄地だった畑を、近所のかたに教えてもらいながら世話しています。

また、自身が旅人だったこともあり、野母崎に旅人を呼び込むために、自宅の一階で食事や宿の提供ができる「旅人応援ハウス」も開設予定。訪れた旅人がSNSなどで野母崎の魅力を発信してくれるようにしたいと話します。

さらに、有害鳥獣に関する取り組みのために、狩猟免許の勉強もしているそうです。

自分が楽しんでいる様子を見て、「楽しそうだな」「野母崎行ってみようかな」と思ってもらえればとSNSで野母崎の魅力や活動を発信しています。

琴海地区地域おこし協力隊卒業生
齊藤 秀男さん

3月に琴海地区地域おこし協力隊の3年の任期が終了した齊藤さん。

齊藤さんは、自身の運営するウェブメディアで琴海地区のかたと話す機会があり、その際に琴海のかたの人の良さや豊富な食、文化などの魅力を知ったそう。そんな琴海を全国のかたに知ってほしいという思いから、琴海地区の地域おこし協力隊になりました。

就任後、琴海地区の情報を誰でも見ることができるようにするため、地域の魅力を発信するホームページ「ことこと」を開設。

また、テントサウナとキャンプで琴海に人を呼び込もうと、民間の自然体験施設「清流と棚田の里」にテントサウナを設けるよう提案しました。自然に囲まれたテントで汗を流し、川の清流に浸かった後は、川のせせらぎや鳥の声を聞きながら森林浴をする。テントサウナを求め、年間を通して市内外から若い人が来るようになったそうです。

昨年12月には琴海地区の飲食店や農家などと協力して「琴海いろどり市」というマルシェを開催し、新たな地域交流のきっかけ作りも行いました。

琴海地区では、次の地域おこし協力隊のかたを募集する準備中にゃ！

5地区の推しポイントをちょこっと紹介！

他にも、この地域には魅力がいっぱい！
お出掛けしてみにゃい？